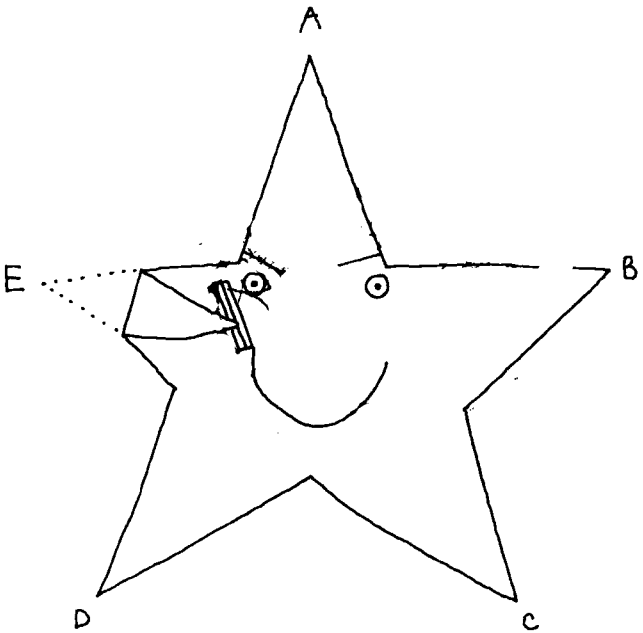
きまぐれ暦（ごよみ）

星新一

きまぐれ暦

星新一



きまぐれ暦（ごよみ）

©1975

昭和50年12月25日初版印刷／昭和50年12月30日初版発行

著者　星新一　発行者　佐藤晧三

東京都千代田区神田小川町3の6　発行所　河出書房新社

電話東京(292)3711(大代表)　振替東京1080 2

印刷　中央精版　製本　中央精版

きまぐれ暦（ごよみ）

目　次

星という姓……7
かゆさ……8
書　斎……8
ド　ア……10
単位について……12
幸福感……14
すごく・やっぱり……16
東京に原爆を！　……17
うどん……26
星鶴（ほしつる）の由来……28
フグのくしかつ……31
新　年……32
減　食……33
おかしな世……36
ブラックユーモア漫画……39
文　体……46
矛　盾……48
ものぐさ……50
家……51
あやしげな仮説……54
米の飯……58
アテネ・マドリッド……60
ノー・サンキュー……66
珍味アングラス……68

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

バスチーユ……69
オランダの印象……70
未来の衣服……83
時代考証……85
七　夕……88
意外な素顔……90
古美術店……92
九　月……93
ショウチュウのなぞ……94
年末年始……101
話　芸……105
コミック・ブック……107
ワンテンポのずれ……109
入　院……112
時代のずれ……115
ギャンブル……117
意味の重圧……119
八月。その戦争と平和……121
団　扇……144
三死に一生……145
絵　本……148
痛　み……149
歴史の教育……151
困った質問……152

男……154
拾いもの……154
空……155
宇宙との縁……156
大伴さんの思い出……157
シンボル……160
旅先の音……162
医院がよい……164
たかが……167
あとがき……205
奥只見……167
むかしの医学……170
ブタの声……172
鷗外と良精……174
横浜・船・海・神戸……178
SFと寓話……188
三十年目のベートーヴェン……192
手の故障……196
トリかカラスか……199

きまぐれ暦（ごよみ）

星という姓

私の名はSFにふさわしい。いや、ふさわしすぎるほどである。その分野の研究家、佐久間英氏の「お名前風土記」によると、星という姓は特に多い五〇〇傑のうち三七七番目であるという。珍しいようだが、割といるのである。同姓の人に会うと「ご出身はどこで」と聞いてしまう。そして、新潟県から福島県にかけて多いことを知った。

私の父は福島県いわき市の生れであった。この地には星という姓が多い。明治時代の政治家、星亨（とおる）の伝記を読むと、彼自身は江戸の生れだが、幼時に母が新潟出身の医師と再婚したため、星という姓になったとある。

四国に行った時、必要があって三文判を買おうとしたら「このへんに星なんて姓の人はいません」と、入手不能だった。

東北の日本海から太平洋に至るこの一帯になぜ星という姓が集中しているのだろう。想像だが、むかし大流星が、夜空を横切ったのではないだろうか。

なお、わが家の紋は九曜星である。大きめの丸のまわりを八つの丸がとりまいている。結婚してわかったことだが、家内の実家の紋も九曜星。ただし、こっちは同じ大きさの九つの丸で環を作った形である。

こうなってくると、うまくできすぎていて、半信半疑になる人もいるのではなかろうか。

かゆさ

理髪店へ行き散髪をしてもらい、つぎはひげそり。石けんの泡をブラシで顔にぬられる。すると、とたんにかゆくなるのである。

指でかきたいが、泡がついたらどこでふけばいいのだ。カミソリに当ってケガをするかもしれない。自由にかけない状態なので、よけいにかゆさを感じるのかもしれない。これをがまんするのは苦痛である。なんとかならぬものか。かゆみ止めの作用のある成分でも、石けんにまぜたらどうなんだ。そんな製品がないのなら、おれが特許を申請して、大もうけしてやるか。

と、そのたびに考えるのだが、理髪店を出るとけろりと忘れる。私ばかりでなく、ほとんどの男性がそうなのではなかろうか。

書　斎

私の作品の大部分は、寓話めいた架空の話である。資料や体験は不必要で、その点はいいが、アイデアを思いつくまでの苦労は、なみたいていのものではない。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

書斎の机にむかい、ひたすら考えるばかりである。この書斎以外の場所では、私はなんにも書けない。近所の地下鉄工事の騒音からのがれるため、ホテルへ入って原稿を書いたことがあったが、出来がどうも気に入らず、帰宅してすっかり書きなおした。

書斎はもはや私の脳髄の一部といっていい。といって、べつに完備した豪華な部屋ではないのである。採光がよくなく、昼でもうすぐらい。しかし、仕事をするのは夜で、お昼ぐらいまで眠っているのが日常だから、採光などどうでもいいことだ。

机と椅子がきちんと合っていない。仕事に熱中してくると、椅子の上であぐらをかき、さらには立てひざをしたりする。あまり大きな椅子でないから、きゅうくつきわまる。

壁はだいぶよごれてきた。部屋を作ったとたん、板張りにすればよかったと後悔した壁である。だが、改装するほどはまだよごれていず、中途半端な状態である。

家は第二京浜のすぐそばなので、車の響きが震動として伝わってくる。大型の重いトラックが通ると、小さな地震ほどになる。

なんだかんだと、不満だらけだ。しかし、考えてみると、小さな不満の散在しているのがいいのかもしれない。採光がほどよく、椅子が机やからだにぴったりで、壁も文句なく、静かきわまるものだったら、アイデアはなにひとつ浮かんでこないであろう。

未来小説には、みちたりた完全な社会のなかで、人間の退化する話がよくある。それと同様に、住宅の場合も、精神的刺激のためにいくらかの不満を残しておくことが必要なわけであろう。もちろん、大きすぎてもいけない。この種の研究はすでにはじまっていることだろうが、さぞやっかいなことであろう。

ドア

これまで私は、ずいぶん小説を書いてきた。そのなかで最も多いのは、ある人のところへだれかが訪れてきて、事件がはじまるというタイプのストーリーである。

たとえば、ドアにノックの音がし、あけてみるとそこにサンタクロース。あるいは見知らぬ美女が立っていて、室内の男に愛の言葉をのべはじめる。精神科医がドアをあけると、そとの男が「おれは殺された」と話しはじめる。というたぐいの発端のものだ。

なぜこんな形式が好きかというと、私の出不精の性格のためのようだ。外出するのがめんどくさくてならないのである。それに、私の執筆時間は夜から明け方にかけてとなっている。つまり、起きるのは正午ごろとなる。

食事をし、新聞や雑誌などを読み、来客と会ったりしていると、いつのまにか夕方になる。また食事をし、テレビをながめているうちに、執筆時間となるのである。外出しないまま、一日がすぎてゆく。もっとも、週に二回ぐらいは外出するが、平均よりぐっと少ないにちがいない。一方、外出好きの作家は、その作品の主人公もあちこち動きまわる傾向があるようだ。

まあ、それはそれとして、ある訪問者ではじまる小説は、書きやすい形式ともいえそうである。アイデアというものは、異質のものの組合わせのことだ。昨今はしろうと発明が大流行だが、豆電球つきのネジ回しなど、だいぶ売れたという。これは豆電球とネジ回しという二つのものの組合わせ。

いや、アイデアのみならず、人生も異質な人間の組合わせといえそうだ。恋愛や結婚はいうまでもないこと。友人関係にしろ、企業体や同好会にしろ、それぞれ特長をもった人どうしの組合わせである。

個人という特長を持った存在、それが偶然によって組合わされ、その結果そこになにかが起る。いい発展になることもあろうし、いやなことになることもあろうが、なにかが起るのである。これが人の世の原則である。

ドアをあけることで、ある二人が出あう。世の原則を最も単純化した形である。私が小説に書きやすいというのも、こういった理由からであるといえる。

また、アメリカの漫画にも、このたぐいの、ドアをあけたら思いがけぬ人物という構図のが、大量にある。そのうち整理分類してみようと思っているが、まだそのまま。つまり、整理がめんどうなほどの量が私のところにあるわけである。

人間はそれぞれ、自己の生活空間を持っている。それが他人の生活空間と接触する部分のひとつとして、ドアがある。訪問する者にとっても、訪問されるものにとっても、まずドアが開かれることによって幕があがる。

といったわけで、私はドアに神秘的な感じすら抱いている。まともにとりくめば「ドア学」という論文が書けそうだが、それほどひまでもない。

単位について

いつだったかテレビの外国映画を見ていて、その会話が気になった。「逃走犯人の身長は約一八三センチ」といっているのである。三センチまではっきり示していて、なぜ約なのかである。しかし、考えてみると、すぐにわかる。もとの英語では「六フィート」なのであろう。一フィートは三〇・五センチ、これに六をかけた換算で翻訳がなされたというわけ。こういうのを正確な訳というべきか。

かつて私は、英国のSFの翻訳をやったことがある。わが国の若い人のためには、メートル法のほうがわかりやすいだろうと、いちいち換算した。フィート、ヤード、マイルなどをメートルに直したので、だいぶ英国ムードが薄れてしまった。船の速度を示すノット（一時間に一海里）という単位には、私のような年代の者には郷愁があるのだが、それも時速何キロと換算して訳した。

文学作品ならいざしらず、SFならこうすべきだと思う。換算表を見て計算するだけの手間ですむ。しかし「一平方インチ当り千ポンドの水圧にもびくともせぬ」という原文には参った。私も、こういう複雑な換算は苦手なのである。

かくのごとく私はメートル法に協力的だが、決して好意的ではない。メートル法は科学史上の最大の失敗ではなかったかとさえ思っている。ご存知のように、メートルとは地球の円周をもとに作りあげた単位。人間不在なのである。帯に短しタスキに長しといった感じがする。一方、人体を基準に発生した一尺や一フィートは、親しみやすい長さで、人間の身長を二つの数であらわせる。一フィートは一二イ

ンチなので、五フィートと3/4といった表現になる場合もあるが。

しかし、メートル法だと、身長は三ケタになってしまうのである。日常生活に関連のある数字は、二ケタ以下ですむようくふうがなされるべきだと思う。パーセントという呼称が好まれるのは、二ケタですむからであろう。ジェット機の速力にはマッハ（音速）が使われ、天文学では光年（一年に光が進む距離）が使われているが、いずれもメートル法とは関係のない補助単位である。東京都民の一日に使う水の量が、霞が関ビル何杯分だなどとよく報道されるが、二ケタでおさめようとする要求からだろう。正確でなければならぬ学術論文はべつとして、一般大衆に感覚的にわかってもらいたい場合には、二ケタ以上の数字を使わないよう、当事者は形容に努力すべきだろう。めんどくさいことではあるが、大衆はもっとめんどくさがりやなのである。面積だって、週刊誌や新聞の大きさなどを単位にしてくれると、そのほうがぴんとくる。

かつてニコヨンという言葉があったが、戦後まもなくのころの、日雇労務者の日給が二四〇円だったためである。それを二ケタで呼びたい大衆の欲求が、そんな言葉を作りあげた。しかし、その後のインフレで、金額だけは手におえなくなってきた。このところデノミ論議がさかんだが、以上の理由から私は賛成派である。ヨーロッパ旅行で気づいたが、ドイツの一マルク、オランダの一ギルダーは、それぞれ日本の約百円に当る。デノミ後の日本がそこにある。二八三五円は二八マルク三五ペニッヒ。二ケタずつ区切ると、はるかにすっきりする。このほうが値上げ抑制に役立つように思えてならない。

以下は冗談だが、デノミが話題になった時、私は百円を「一新円」などにせず、「一尺」と呼んだらと提案した。七五〇円は七尺五〇銭になるのである。発音が似ているし、すんなりと慣れるかもしれない。尺貫法が廃止になったのに、尺は当用漢字にあるのである。ここで利用したらどうだろう。

店で品物を値切る時、両手をひろげて「これくらいまけないか」と交渉したら、ちょっと面白いので

はなかろうか。金銭という抽象的な単位に、長さという具体的なイメージを導入することは、必ずしも悪くないのではなかろうか。

ついでにもうひとつ、なかば冗談なかば本気の提案。昭和の年数と西暦との二重のわずらわしさの解消法である。年号の廃止は、「日本人とユダヤ人」という本のなかで、自主性のないことだと皮肉られており、意地でもやれない。そこでだが、西暦二千年まで昭和をつづけ、二千一年になった時、なにかおめでたい行事を考案し、「日扇」でも「弐泉」でもいいから、そんな発音の年号に改元するのである。日扇二年、日扇三年となれば、あとはスムーズだ。以後ずっと二ケタですむ。いま西暦が日常生活にとけこめないでいるのは、一九七一などと、四ケタで呼ばねばならず、最初の二ケタの省略ができないからだが、その点も解決される。もっとも、あとかなり先の話だが、われながら悪くないことだと思っている。

幸福感

「どんな時に幸福感をおぼえるか」と聞かれると、私の場合「小説を書き終った時」と答える以外にない。こんなに楽しい気分はない。そのあと、ウイスキーの水割りのグラスに口をつける瞬間など、なんともいえない。

それを味わうために生きているようなものだ。私が長い小説を書きたがらず、短いのばかりをいくつも書くのは、ここらあたりに原因のひとつがあるにちがいない。快感に数おおくひたれるからである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.